

打倒、女王

2006年兵庫国体
バスケットボール少年女子 [18]

後進育成へ種はまかれた

「平成」が終わり「令和」の時代となった。

2006年兵庫国体バスケットボール少年女子で地元兵庫のメンバーだった12選手。3分の1がその後、学校現場で子どもたちを教えている。

「当時を思い出すことはありません。あの期間は濃かったです。」

岩手との1回戦で西チーム最多の23点を挙げ、白星発進に貢献した吉田（旧姓広瀬）真希は懐かしむ。

須磨学園高から園田女大に進み、現在は母校の神戸市立伊川谷中で教壇に立つ（育休中）。

中学時代には、副甲状態ホルモンがうまく作用しなくなる副甲状腺機能低下症を患い、1年の夏

その後①



市尼崎高に今も飾られている兵庫メンバーとスタッフの集合写真＝2006年秋、神戸市須磨区緑台（吉川公明さん提供）

は競技ができなかった。そこから「恩師が引き戻してくれた。運動嫌いだっただけに、バスケットという道をつくってくれた」。教職を目指す原点になった。

自身も誰かの光になる

「レベルの高い相手に対しても、工夫してやれば戦える」
兵庫の「縁の下の力持ち」

「努力は競技ができなかった。そこから「恩師が引き戻してくれた。運動嫌いだっただけに、バスケットという道をつくってくれた」。教職を目指す原点になった。」

「ち」だった荒木恵美。市バウンドなど、地味な作
尼崎高女子のアシスタントの重要性を説いてき
トコーチとして、教えた。
に呼び掛ける。

ヘッドコーチは元兵庫監督の吉川公明。チームは夏と秋の県大会で3連覇中と、存在感を放つ。荒木は夙川高、専門学校を経て会社勤めをしていた頃、吉川から指導のサポートを頼まれて転身を決意。正社員の職を捨て、外部コーチとして関わり10年目を迎えた。

「バスケットは人のために走ることが多い。ボールを持っている時間の方が短い」。守備やり
14年前、地元国体をきっかけに育てられた園田は花を咲かせ、新たな種をまいている。
市尼崎高の体育教員室には今も、国体メンバーとスタッフの集合写真が飾られている。

敬称略
（藤村有希子）
おわり

NEXT! 動画

6月13日(土) 神戸新聞分

大切なことは 勝手に無駄と決めつけずに
意味を考へること。答えが出て、無駄と思ふことの
意味を知ります。